嘉平次 おさが 生玉心中

近松門左衛門作

上巻

次第∧今に傳へて老松の。〱。かはらぬフシ色を賴まん。地其の松が枝の宮柱今に榮えて數萬人。心々の願立に。神のお身さへア丶急もじの。まして流れの憂きふしや。日毎に變る身の勤。今日も苦界の神詣道頓堀を天神へ。駕籠も一里を飛梅や。フシオクリ社の∧めぐり浮れ出でハルフシ見渡せば。數々の。花屋植木屋立並び。色賣る〱。花の色賣る我も色賣る身は仇花の小オクリ花に。價の高下があれば。勤の品も段々の。スエテ品々有るも道理や。花と色とはもと一つ。されば身を賣る金の名を。フシ花代とこそ名付けけれ。先づ鉢植の作り松すんと流しの一枝は。太夫の威勢備りて。恪氣の嵐手管の雨無理な。口說の霜雪もフシ騷がず痛まずいやましに。ハルフシ情の綠。はびこりて。松の位と譬へられしも憎からず春立ち。冷泉行けば。色失せて。さびしき梅も捨てられず。是天職の姿にて一夜流れの軒端の梅の。あだな袂にハルフシ香をとめて。歌さんさ思ひの種かいの。根からいやなら。添ふ氣ぢやないに。騙されてにくや。つらやを逆樣に。客に泣かせて後朝の。別れあやなき菖蒲草。フシ局女郎に準らへて牡丹畠の名盡しに。大臣も目を遣手の玉が。忍ぶ戀路を石臺の。女蘭夫蘭は呂州の姿。白と眺めて白牡丹しやんとしてから。フシいやみなく。しかも色香の深見草。歌思ひ切れとは。死ねとの事か。江戸生きて添はれぬ浮世なら。いつそ煙に成りたやな。辛氣もやして待宵に。似たりや似たり。フシ桂仙花。しばし休らふ。木陰を宿の枝は木斛我が身は茶斛。うろさき里の勤ぞと。誰かは黃楊や白槇や樅。南天に小手毬にいとし。男と射干の。扇の形に末廣の。地逢瀬を祈る神垣に柏手ならぬ柏屋の我が名もさがの若楓。戀草千草思ひ草。眺めらるゝも眺むるも。同じ色なる袂百合。扇かざして神々詣。安井生玉清水坂を。しやならしやなら〱ちよこ〱走り。しやんとして見よや。歌柏屋さがははすはにござる。詞戀の意地酒ヤトン〱。手もとでかゝる。押へてかゝる。どうでもさがは濡者ぢや。地油壺から出すよな女房しんとろとろりと見とれる女房。詞すねる男を追つかけて。地そこら〱をずんずと呑ましやる〱。サナエイトン〱。エイトン〱〱〱。しんぞナホス一夜はフシお手枕。日影色どるさつき棚。草の異名はさま〲によむともよしや葦簾西の茶屋から我を呼ぶ。せはしないとて見遣して見すつる。花や三重∧恨む

らん フシ色の勤の。憂きふしの。峠を越えて伏見坂懸のないにも習ひとて。あたら膚を柏屋の。さがは大和の一見客が。今日は天滿の社内の茶屋で酒と出かけて遊ばんと。一昨日からの揚續け。空も雨氣の駕籠の桐油。寶木の花に氣を晴し フシ清水屋にこそ入りにけれ。詞茶屋には待ちかねエイさが樣。駕籠の衆なんとして遲かつた。お客樣は待ち焦れたつたひとり飲んでぢや。いざ先づあれへといひければ。さればいの。こつい客の辯に揚の日は半時も。側に置かねば損の樣に吸付いてゐたさうな。それで勤の續くものか。是駕籠の衆頼みます。わしは雨氣で頭痛がして。寢んでゐると間に合せ。盃の相手になつて。日頃の手並にいきつかして下んせ。地どつこい氣遣なされますな。任せて桶でも盥でも呑みつけてやりませう是おか樣。詞精出して豆腐燒かつしやれ。鰻も四五本燒かつしやれ。地冷飯も燒かつしやれと からげおろして入りにけり。さがは主の側に寄り。詞さつきにいうておこした。蜆川の嵐の芝居へ便宜して下んしたか。樣子はどうでござんすぞ。なんの如在致しましよ。お前からの書付を其のまゝ持つてやりました。心中の狂言の口上の所。すぐに觸れてもらうたと。使はとうに戻つたがもうお出でなさるゝ筈。定めし狂言に見とれて。地それでかな遲いかといひつゝ炙る豆腐より フシさがが心や焦るらん。地假初の薄茶茶碗もなじみては。濃茶茶碗屋嘉平次はさがが情の錦手に。染付けられて親兄弟の意見も耳に蓋茶碗。フシ深編笠も隱れなく。地さがは見つけて是爰ぢや。爰ぢやと招けばちよこちよこ走り床几に腰を打ちかけて。側へ寄りたい抱きつきたい言ひたい事のわくせきも。主が見る目憚りて。他人向なる折柄に奧よりなんぞお肴。銚子替やゝと手をたゝくあゝいと引くのがお定まり。蒲鉾梅干粹な花車。氣を通して立ちければ。のう二日逢はぬはどうぢやいのと。顏差入るゝ編笠のフシ下こそ戀の宿りなれ。地嘉平次もなつかしさ。詞此の中は田舍客で平野屋にぢやと聞いたゆゑ。往きか戻りに顏見よと濱側を用有りげに。地往つゝ戻つゝ入りもせぬ和中散買うたり。心太屋の水機關もさう〳〵見ては居られず。うろ〳〵すれば長町脇の子供が見知つて。ありや〳〵。東の難波燒が坂町通ひ。詞柏屋通れば二階からちよいと招く。のつ是なんとしよと 地惡口いへばあたりからはきよろ〳〵見る。親の内へは行かれぬ首尾。出見世にも尻据らずいつその事遠かけに。蜆川の芝居の曾根崎の狂言見て。醬油屋の徳兵衛と我等が思ひ引合せ。憂きを晴す合點で。其の通り一筆書いて小辨を頼うで置いて來た。詞その文見てか。けふ爰へおじやつたは天神樣の御利生。地神も佛もなじみが本。親仁の見世の燒物に一文宛でも天神樣。お馴染ゆゑぢやといひければ。詞さればいな。其の文見ると嬉し

うて。客を勸めて此の天滿といふ思ひつき。幸ひと此の清水屋は。わしが前方扇風呂にゐた時からの近づき故。妾を賴んで芝居へも呼びにやりました。地それについても父御さんの内方へもまた行かれぬ首尾と有る。これ逢ひたい見たいはわしとても。ほんに／＼寢た間にも忘れねども。遂には末で女夫に成る大願ではないかいの。詞其の間が互の辛抱。人は次第に身を持ちあげるがほんなれど。扇風呂のさがともいはれた身が。晦日節季は前垂がけで。裏屋背戸屋慳貪屋三界かけ取にありく樣な。地勤するのも澪山に逢はうため。こなさんが大和橋の濱納屋借つての出見世も。わしが近くに居ようため。懇な宿では斷わりたて出見世へ泊りに行く夜さは。女夫所帶をする心。同じ寢るのも身につく樣で嬉しい。詞されども一度は父御さんのお耳へ入らねばどうもならぬぞえ。聞けば姉御さん。堺筋の鹽町邊に緣付してごんすとや。此の姉さんなど賴みまし。前方から父御さんにようう思はれて下んせ。昨日の晦日も内に居さんせず。地わけの惡い評判きけば頭髮一筋づつ。拔かるゝよりも苦しうて。氣をもんでももがいても身は裸なり工面はならず。詞私大方は四日迄とわしが請合置きやした。地こなひとりなら死んで成りと了はうが。茶屋さん惡ういはするが口惜しい悲しい。惡道に引の勤する者は人の小息子唆かし。

入れるの不孝者にしてのけると。十人が十人で。町の衆は思はんす淚がこぼれてうとましい。私可愛が定ならば。父御さんとも兄弟御とも首尾ようして下んせと。淚ぐみたる親身の詞 フシ更に。勤と思はれず。地嘉平次も共淚。詞今に始めぬそなたの心底過分々々。ハテたつたひとりの父親なり。一ッ屋の五兵衞とて若い時は男を磨き。物の筋道六義を立て無理をいふ人でもなく。子供が少しの色遊。五百目壹貫目遣うたとて悔む人ではなけれども。どうともかうとも叶はぬ事が有るぞいの。今迄は隱したが。弟の幾松とおれとが間に。十八に成るおきはといふ妹が有る。もとは在所一ッ屋の叔母の娘。後々は此の嘉平次と。從弟どし女夫にする約束で。藁の中から養ひ。死なれた母の肝精で物も書き縫針。綿もつむ機も織る。算用もやりをる顏も十人なみなれど。地そなたをのけて此の世界に女子が有ると思ふにこそ。綿をつまうが機織らうが。おきはは愚か中將姬の再誕が。蓮の糸で一重羽織おりやるとて。見向きもする平でない。されども親の契約小さい時から許嫁。今日祝言明日祝言とせがまるゝ。詞一理窟こねたの。是親仁樣。わしや畜生ぢやござらぬ。胤腹分けねど兄弟。妹よ兄樣といひつつも。夫婦に成るは犬鶏のする業。男も立てた一ッ屋の五兵衞は。畜生を子に持つたといはせては私も不孝。此方も一分すたる事ならぬ／＼と云ひ破る。そこらを詰まらぬ鎌親仁。ヲヽこりや出來した。イヤよ

うゝうた。ヤイ畜生吟味する根性で茶屋者と腐り合ひ。親にも知らせず夫婦に成る極めして。行先が借錢だらけ。人に疎まれ指さゝるゝ是が又人間か。五兵衞が目には畜生と見えるわい。茶屋者と緣切つておきはと女夫に成る迄。門詰も踏まさぬと打たれぬばかりの首尾なれば。地主家へとては禁制。姉婿は他人なりずんど堅い商人。一人の弟は眼病氣とひ談合も誰とせう。いろは茶屋から坂町かけて負うた門は七八軒。銀高僅か壹貫目餘り。身を刻んでも當なければ。駈落か自害と思ひ定めた所になう。詞生身に餌食天道人を殺さず。覺えてか此の前。扇風呂でそなたの事で大喧嘩した。西國橋の印傳屋の長作。地味な事で其の喧嘩から。兩方心底見屆け齒の根も喰ひあふ懇親。彼奴は所帶持なれば少しの取替もしてくれる。此の長作が肝煎で中國のお屋敷　。親仁の店から錦手乾山音羽燒の。皿の鉢の茶碗のと。十五六兩が物賣つてくれ。晦日にお銀が渡る。請取書いておこせと四五日先に取りに來た。定めし昨日請取つつろ。詞今日嵐の棧敷に侍衆に附いてゐた。おれも芝居を立ち樣に棧敷の裏から音信て。すぐに爰へ來てくれとかた〴〵約束して來た。今では此の平に命もくれる挨拶。筈ちがへる男ぢやない。芝居果に長作が銀持つて來るか。爰へもぱつとはずまうし。こちが出見世の仕舞は少し取る懸も有る。二百目あればざゝんざ。伏見坂から道頓堀。一厘殘さず物の見事にしまうて。待つてゐや節句から面も笠も脫がせう。ヤ借錢の笠は脫いでも傘は放されぬ。又降つて來た。南無三寶あれ見や。地あの菅笠着て來る女房。鹽町の姉ぢや人。目の悪い角前髮は弟の幾松。詞ムウ〳〵ほんに恰好がよう似やした。それ〳〵爰へござんすこなさん逢うてもだんないか。いかな〳〵佛も見せともない。地あの幾松が手を引いて來る腰の太い。尻のひよつと出た女子。姉の内の竹といふ飯炊。あいつが見た事聞いた事。其の日の中に大阪中に事觸。こちが取沙汰何のかのと親仁に告げるいやさに。少し濡れかけて騙したりや。詞惚れられ自慢でもう其の事を觸れあるく。それであいつが名を筒拔と附けて置く。そなたも姉の知つてぢやけな。アヽうるさ。地どこぞにちよつと隱れ笠隱蓑なき身の置き所。駕籠の雨桐油打明けて。二人が膝を組み合せ　オクリ身を抱き〳〵合ひて身を忍ぶ。地姉はそれとも道のべの清水が見世に暫しとて。フシ爰借ますとぞ休らひける。地奥には猶も飲みしこり踊るやら謠ふやら。騒ぐどさくさ若草の妻もこもれる駕籠の中。あられぬ姿顯れて姉や弟の見咎めん。さがは奥より尋ねんかと怖さに猶も身を寄せて。締め合ふ中の冷汗は。桐油もる雨の如くにて　フシ肌着も。絞るばかりなり。地奥の客がだら聲にて。詞こりやさがは何してぢや色がなうて呑めぬわい。頭痛がしようば爰へ來て寢やしやれ。どり

やお迎に自身お馬を出されうと。地表へ出づるひよろ〳〵足駕籠の者ども生の酔。さが様〳〵。迷ひ子になつてか。返せ〳〵さが様返せ。ヤア詞爰にか。酒飲むまいとて手が悪いと。地姉に取付く手をもぎ放し。詞エイ狼藉なさがとやらぢやござらぬぞ。こちや道通り。雨宿りに茶屋の見世へ腰かければ。賣物と思やるか。地阿呆くさいと叱られて南無三寳。嵯峨のお山と取違へ愛宕山へ登ろとした。御免〳〵のちろ〳〵目あたりを見廻し扨こそな。愛宕山から見下ろせばさがは一めに見付けたぞ。駕籠から帯の端が見えるぞさがを捜し出さうかと。寄らんとすればアヽこれ〳〵出まする〳〵許さんせと桐油の蔭より這出て。詞こなさん違だまして隠れんほしたればつい捜し出された其の代りになんぼ成りと飲まさんせ。どこのお内儀様やら麁相な耐へてくだんせ。みんなごんせ地〳〵と奥に入れば嘉平次は。さがを放れし嵯峨松茸。より殘されし風情にてフシ駕籠に縮んでゐたりけり。

地姉はもとより商屋の妻と成る身の目も早く。ちよつと見るより一寸やらず駕籠なは弟の嘉平次。扨情ない身持かな。引きずり出して叱らう。いや〳〵供の下女が見る所。さながら若い者人中で恥もかゝされまい。身の成る果が可愛い父様がいとしい。おきはが心が無慚なと。さま〴〵胸にせめ餘るスヱテ涙は聲にはや漏れて。詞なう幾松。そなたは仕合なよい時に目を病んで。あさましい事見やらぬ。今のお山が今日一日は奥の客に身を賣りながら。座敷を忍んで駕籠に隠れてゐた體は。外に深い人にあふ手審とやらで有らうが。お山はお山の道にもせい。其の深い男は。誰ぢや知らぬが有るまい事ぢやないかいの。定めてこちの嘉平次もまあの通り。嘉平次の悪性ではお山と相駕籠で。桐油の下に屈んでゐようも知れまい。見るめも悲しいあさましい。地是といふも親の恩を忘るゝゆゑ。心もみだらに身を持ち崩し人にも人といはれぬ。父様や母様に娘は有り息子は有り。何を不足におきはといふ子をもらうて。乳母を取り守なつけ憂き世話がやみたかろ。小さい時から女子の手業も教込み。心も誠實に育てあげ。嘉平次と夫婦になしたらば身代の薬なり。商の勝手も能く。繁昌もさせたいと嘉平次がいとしいばつかりに。世話をやんでやみ死の。母様の恩をフシはや忘れ。可愛いげにおきはもほんの天竺浪人。詞見世の若い者どもあの女子始として。地とやかう評判する時は。姉が耳へ八寸釘を打たるゝよりも猶こたへる。詞若しも自然此の駕籠にお山と嘉平次と乗合つてゐる所。今の客が見付けて引きずり出して踏むとても。何と言譯有るものぞ。見こそせね聞きこそせね。定めてさい〳〵行く先で恥をかきつらう。地其の身ひとりの恥かいの親兄弟は何になれ。來世の便はなけれども。あの人故に迷はつしやる母様がいとしいと。慈悲の涙も

目に餘る駕籠に當てのくどきごと。嘉平次は身も縮み。命も縮まる許りにて フシ消えも。入りたき心地なり。幾松は嘉平次が駕籠にありとも氣もつかず。詞エヽ曲もない兄きの心今ならでは申さぬが。私が眼病もあの人ゆゑ聞いて下され有る事か。おきはとそちと夫婦になれ其の代りに家屋敷。商の株ともに親仁の跡を嗣がする。合點せい〳〵と道ならぬ事耳かしましく。所詮わしが死ぬるか不具にして下されと。山上樣へ願をかけたれば御利生で此の病。つい時花目の顔すれど。目は綿繰で繰る樣で。響いて物もいはれぬ。天滿に上手の目醫者が有るとつれてお出でなされしゆゑ。道すがら物語もと是迄は參りしが養生はしませぬ。私が盲になつたらば。兄樣のひとりして見世の事も取捌き。内に身が据つたら。自らおきは樣と一つになる氣も出來ませう。地エヽわしら迄身を捨て。是程に思ふとは思ひやりも有るまい。きこえぬ所存な兄きやとスヱテ目をかゝへて泣きければ。供の竹が差出口。詞嘉平次樣といふ人は嘘つきの骨頂。わしにもきつう惚れてゐるいつぞ日の暮に出見世へ來て。思ひを晴らさせてくれと口說かつしやるいとしさに。お使の序に寄つたれば。今宵は遁れぬ客が有る重ねてこちから便宜せう。心ざし嬉しいと錢三十程包んで懐へ入れらるゝ。むつと腹が立つて來てわしや店屋者ぢやないぞや。身を賣る女子ぢやないぞや。肌觸れねばきかぬと喚いたりやこりや。誠の契は重ねて約束のしるし是ぢやというて。引寄せしつぼりと頰ずりして。サア往ね往ねと突出さるゝわしも名殘が惜しうて。跡のぞいて見たれば氣味惡さうに。見世の手水鉢で頰を洗うてけつかつたと。地語れど二人は餘りの事紛らす耳の餘所の町。風に嵐の芝居果てオタリちらし〳〵太鼓の聞ゆれば。南無三寶長作が來ぬ先に。姉も住んで下されかしと飛び立つばかりの駕籠の中。今にも來たらば何とせうのめ〳〵とも出られぬ首尾。出ねばぐわらりと筈ちがふ氣をもんでも詮方なく。何御存じなき天神を フシ俄に賴むばかりなり。地約束なれば長作暖簾の書付見て。ムウ淸水屋は是ぢやな。詞少たのも道頓堀の茶碗屋嘉平次は爰にか。約束の通り長作が來たというてたも。地嘉平次〳〵といふ聲に姉弟驚く其の中にも。姉は知つたる駕籠の中。思ひやりては諸共の心。遣ひぞ殊勝なる。さが聞き付けて走り出で。詞ヤア長作樣久しうごんす。さがどのか嘉平次が來るからはこなたも爰にと思うた。我等は今日侍衆の相伴で。嵐の芝居から直に鯉屋へいく筈で是。袴の體なれど嘉平次が何やら内々の一物。今日入らいで叶はぬ持て來てくれといふ。地棧敷の事武士の前。おうとはいうたが何の事ぞ。つんと此方に覺がない。地嘉平次はどこにぞ早う逢うて聞きたいと。いへどもさがは姉の前駕籠にともいはればこそ。詞いやちよつとあそこ迄追つ付けて

ござんしよ。今日入らいで叶はぬとは私も聞いたが。あの様の賣物をこな様が取次いで。屋敷方へ賣らんした其の銀が十何兩とやら昨日渡る筈ぢやげな。請取もいつて有るとの事。大事なか私に渡さんせ。さなかまちつと 地 酒でも飲んで待たんせと。いへば長作ヤア〳〵。詞 大それた事いひますの。酒所でござらぬ。エヽいかに身が術ないとて不器用な氣に成り居つた。いかにも賣物は取次ぎ銀高壹貫貳百三拾目代。拾六兩惜にあれに手渡しして。則ち自筆印判の請取を握つてゐる。地體是は九之助橋親五兵衛の店の賣り物。銀は己れが使うて親の手前の算用立たず。地 此の長作を横道者にせうとは底意の怖い盗人。此の物騒の世の中こなたの所も裏は野ぢや。内の勝手は知つてゐる 必ず用心さつしやれ。身があつければどのよな事。しようも知れぬと眞顔の言分さがはつと色違ひ。姉弟は猶身にかゝる難儀を察して駕籠の中。くわつとせき上げ身をもがきエヽ無念や騙られた。姉の手前が恥しいいつそ驅け出で。踏んで腹を癒ようか出ては姉の恥辱か。早う歸つて下されかしと千萬砕く氣の働。胸の鞴に怒の火焰。フシ 駕籠もゆらめくばかりなり。地 長作駕籠には氣もつかず。詞 是さが殿驚く事ではない。地體あの氣な生れつき。それを知らずに仇惚して此の長作は捨てられた。酷いぞや〳〵。なんと元へ戻しておれが懇してやらうか。嘉平次などとは違うた十貫目や拾五貫目は。手の悪い事せずに見んごと今でも〳〵ぢや。地 こなたも憎かろ筈がないとしなだれ寄つて手を取れば。アア 詞 いや〳〵無禮過ぎた置かんせ。あれ町の御内儀樣も見てござる。勤の者はあんな者かと蔑みが恥しい。たとへ平樣が盗人で有らうが强盗で有らうが。いとしうて〳〵命をやつた此のさがぢや。なんぼこなたが佛程正直でも顔も見たうないわいの。サア先づ一旦さういはねばわけが立たぬ。それもこちに合點ぢや。今に嘉平次が大盗人しをつて。一ッ屋の五兵衛鹽町の姉が首にも繩付き。其の身はこなたの裏の西の方に。烏のとまつた樣に首ばかりになつた時。長作樣懇しようといはうより。地 今思ひ切つたれば彼奴も仕合此方も徳。どれ前の樣にむつちりと肥えてか嘉平次めが。吸取つたか。肌を見たいと懐へ手を入るゝ。取つて突退け小見ともない置かしやれ。地 言ひにくけれど此のさがと。平樣とは一心づくで逢うてゐる。こなたの樣な口先ではないぞやと。地 おろ〳〵涙の腹立聲。嘉平次はもう是迄堪忍袋も破れかぶれ。飛んで出でんとする所へ。姉の内より迎への丁稚大息ついで申しお家樣。ちやつとお歸りなされませ。早う呼んでこいと旦那樣は門に出て待つてござります。早う〳〵とせきかくる。アヽ 詞 心許ないけたゝましい何事が起つた。こりや爰は公界ぢやぞ誰も人の名はいはず。地 樣子ばかりちやつといへ構へ

て人の名をいふなと。心の利いたる姉の利發。使はるゝ丁稚も機轉者。角屋敷の親仁様がお出でなされて。彼の板圍の惣領殿が一昨日から在所が知れず付居借錢乞。親仁様も一分立たぬお前の留主も合點がいかぬ。兄弟の事なれば目醫者にかこつけ惣領殿をかくまへたに極つた姉も共に勘當ぢやと。喚き散してござりました。それで走つて來ましたア丶 フシづつなやと息をつぐ。ア丶 詞そんなら往なざなるまい。行かいで叶はぬ所も有り。見捨て難ない事もあれど。男も女子も親の命には背かれぬ。殊に夫の呼使。ア丶女郎様お邪魔 地しましたと怪我の振にて駕籠にはつと行きあたり。詞ハア駕籠が有るとは氣がつかなんだ。是に限らずうろたへては鼻の先なことに氣がつかぬ事が多い。商ひ物の請取なら。買主の手へ渡りさうな物が。中使の手に握つてゐるとはの。是も氣のつかぬ事と。地敎へる智恵や天神を フシ伏拜みてぞ歸りける。地嘉平次憚る方もなく。駕籠踏散し躍り出で長作が髻取つて引据ゑ。詞此の嘉平次を盗人の騙のとはどの頬桁で吐かいた。先は武家方中取したと思はれては出入がならぬ。先づ請取書いて渡せ銀取つてやらうと。うまく〱とよう喰はせたなあ。今のは身が姉ぢや人。駕籠にゐるのも見付けてぢや。地姉のまへでよう恥を與へた。人かと思うてはまつた。涙がこぼれて口惜しいとスヱテ歯がみをなして泣きゐたり。詞ヲ丶成程姉とは一言で見てとつた。買主の方へいくべき手形が中にとまつて有るとは。なんぢや女の猿智恵。先へは此の長作が請取して上げた。地あれは身が方への請取。汝も小才な奴ぢやもの。合詞銀も見ずにあたゝかに請取をせうわいなあ。エ丶さもしい騙めヤイ。詞銀がほしくば穢い云ひかけせうより奇麗に家尻切れいやい。扨も巧んだ〱今思ひ當つた。嵐の芝居の曾根崎の狂言が。面白うて再々見るとぬかしたがよう見覺えた。取りも直さず油屋の九平次。惣じて狂言淨瑠璃は善惡人の鑑に成る。地汝は騙の手本にするか。師匠の九平次より倍越した大騙。此の春おのれに三百目銀借つた。懇親の中手形もいらぬとぬかしたれど。よい中の垣と預り證文してやつた。それに引きつぐ合點なら差引して算用せい。詞こりや油屋の九平次。醤油屋の徳兵衛を。だました格を出したらばちつと頤をくひちがよう。ちよつと手をつけるが最期ぢやぞ長作と。腕まくりしてねぢ寄れば。ヤアびこ〱するない。わやにしてもさせぬ〱。手形の銀は手形の通り取る所で取つて見しよ。ヲ丶三百目の手形に十六兩はえ遣るまい。遣るまいとはどうして。先づかうしてやるまいと面甲はうどくらはする。地ヤア二歳め打たれてゐようかと打ちかくる。腕捻ぢ上げひつくり返せば起きあがり。むしやぶりついてたゝきあふ。さがはあせつてなう喧嘩々々と呼ばはる聲。客も駕籠も酔つぶれさせぬ〱と

割込んで。ひよろつく足を踏みこかされ。支人踏んだは堪忍せぬと相手がどれやらめつたぶち。大道へまくり出で大盡も泥まぶれ。駕籠の者もちんば引く。さがは嘉平次圍はんと身を捨て駈け廻る。喚く人聲雨の音 三重 瀧を流すに異らず。増 祝子宮仕棒突き散し。社内の騒ぎ狼籍千萬出でよ〱と制すれば。どやくや紛れに長作は フシ 行方なく逃失せたり。地 茶屋は思はぬ踏立はや日も暮れた御門がしまる。お客様もはやお立ち。さが様は大事の身。駕籠の衆早う乗せて往なつしやれ。お客様も傘貸しましよか。但しお駕籠借りましよか。詞 いや〱駕籠は錢が出る。ただ貸す傘を借らぬが損さがは夜晝身どもが揚。道の間も算用の内。地 駕籠に附いて歸らうと跣足に成つて出でければ。さがは心も暗紛れ。なんとしてぢやどこにぢやと見廻せばアヽ悲し。平は髱もかき亂れ亂るゝ雨の藤の蔭。濡れて立つたるあぢきなさ勤とて口借しい。大事の男をぶちたゝかせ。濡れしをるゝを見てゐながら我が身は駕籠に乘る事か。エヽまゝならば飛下りて共にだいても濡れう物と。見やれば男も目を合せ。焦るゝ中の憂き涙いとゞ雨こそしきりなれ。詞 なう駕籠の衆先づ待つてや。わしや此の桐油がうつとしい。身は濡れても厭はぬ。是を爰に捨て置いて俄に雨に逢うた人。着て下されば本望。地 是はさがもらうたと手を上げて引き絞り。疊んでひらりと捨てければ。平は立寄り拾ひ取り押戴きて雨に著る。田蓑の島のやもめ鶴。鳴いて立ちたる哀れさに。アヽ忝い誰かは知らねどよう拾うて着て下んす。わたしも其の下に暫しが程の雨宿り。こなさんも其の通りその雨桐油を一樹の蔭。他生の縁でござんすと。駕籠は見かへる嘉平次は見送る中に降る涙。つれなや神の梅の雨降りへだ。てゝぞ 三重 別れゆく。

中之巻

フシ 心々の。商ひもみな世わたりの大和橋。下行く水の泡よりも色にぞ銀は消えやすく。際は素燒の明德利今日の菖蒲の節句にも。見世指身皿とやかくと。人も火入や灰吹も碎けて物や思ふらん。地 繁昌の地の紋日さへ更けて淋しき五月闇。駕籠の者ども提燈さげ。嘉平次が見世割るゝばかりに叩けども。誰そと咎むる人氣もなく頻に叩けば家主。紺屋の若い者ども大欠伸して出合ひ。詞 誰ぢやい。やかましい。一年に一度の五月の節句我人皆休んでゐる。嘉平次殿は晦日前から爰には居られぬ。二日の晩方ちよつと戻つてそれから影も見せられぬ。掛乞衆なら昨夜乞うたがよいわいの。節句しも何事ぞ。惣じてそこは出見世で火を焚く事も御法度。主家は松屋町九之助橋の角。一ッ屋の五兵衛殿隱れはない。いや掛乞ではござらぬ。伏見坂町柏屋のさがと申すが。是も二日の夜から見えませぬ。今日で四日樣々にしても知れませず。こんな所に

よもやとは存じながら嘉平次樣とは深い中。地念の爲でござるといふ所へ理窟臭い白髮交り。詞嘉平次殿はまだでござるか。歸られたらいうて下され。西國橋印傳屋長作から參つた。手形の銀子不埒に就いて。明後日お願ひ申しますと。ア丶聞くに及ばぬ。妾は出見世の店貸。何事も存ぜぬ本宅へ〳〵と。地取合はねばせん方なく フシ皆東へと走りける。地紺屋の者ども呆れはてなんと淸介。詞此のさがといふお山見やつたか。ム丶そなたは終に見ぬか。再々妾へ泊りに來たそれは〳〵よい女房。いかにも〳〵嵯峨の釋迦。毘首羯磨の御作というてもだんないと。地いへばひとりが頷いて。ム丶それで聞えた嘉平次の。赤栴檀と打笑ひ。しむる門口しん〳〵と川音更けて靜なり。世の中に。秋果てよとてつきし名か。今は身にさへ秋のさが。平とふたりが二日の夜身の憂きまゝにふつと出て。どこをとほ〳〵行く先のスヱテあてもない駕籠かりの世に。死なねばならぬ信濃紡の絲よりも。心が細く氣も弱く廣い國をも我と我。心で狹く住みなせし フシ日本。橋にぞ着きにける。詞なう平樣。どれ顏見せさんせ。いとしや漸々に氣が暗うならんす。どう思うてぞいの此の樣にうか〳〵と。唐高麗を歩いたとて壹貫目と上つた銀。降り湧かう筈もなし。地其の中に見付けられ見苦しい目にあふ時。難波燒の嘉平次が死んでものけず。茶屋の銀負うてあのざま見よといはれた時。詞此の頃天滿で姉御さんのおしやんす通り。地御一門迄面よごしとても生きぬ覺悟の上。早う死なうぢや有るまいか。詞ア丶思へば姉御さん。こなさんを大切にいとしさうなお詞。さがといふ名は聞いてなり大事の弟を先度の奴が。地殺し居つたか怨めしいと憎みを受けうが悲しいと。手に取付いて泣きければ。詞チ丶今宵は延ばさぬ合點なれど先づそつと出見世へ行て。裁刀でも用意しわが宿と名づけた出見世の門口。夫婦手を取り最期の門出する心。嬉しや通りの人にも逢はなんだ。地ザア這入りやと戸を押して南無三寶。詞つひ引摑さいて出たれば。親仁からか家主からか門に錠をおろした。地こりやかう有る筈とあたりを尋ね。栗石拾ひ。力に任せしやん〳〵しやん。しやん〳〵〳〵と打つ響きあたりはしん〳〵遠音のこだま。紺屋に聞きつけすは盜人よより棒よ。提燈と若い者どもかけ出る音。さがを後に羽織の下。裾を被きの海人ならで人の見る目も覺束な。詞ヤア嘉平次殿。此の中はどうぢや。際の日に商人の見世を捨ててどこへぬつくり這入つてぞ。書出しやら掛乞やら今宵迄も尋ねて來る。返答にも困つた。エ丶わけの惡いお人ぢやなう。尤々。京の清水燒にずんと安い仕舞物が有ると聞き。人に先を越されまいと俄に上つて漸今朝下つた。日頃弱點の有る此の嘉平次。さぞ逃げた走つたと評判でござらう。親仁も商ひに精出すとていつにな

い機嫌で。今夜は出見世に泊れといはるゝ。どこも首尾になりました。家主殿の錠さうな。サァ鍵が有るなら明けて下されとてもの事に火ももらはう。行燈に點して下され。何かと皆の御苦勞。其の代りに今度の清水焼には利がある。わつさりと振舞はうとさがを圍うて身を背け。此の期になつても口利口 後を見せぬは兵なり。其の間に錠明けて是火も點し付けました。茶でも所望にござらぬかと表へ出れば嘉平次は。後退りして入替り。もう休んで下され明日お目にかゝらう。いかうねむたい寢まするとはたとさして内よりかけがねしやんと締むれば。さがは溜息身をふるはし。早う死んでのけたいと呫くも只涙なり。表には猶不審を立て小脇に打寄り。今夜の歸り合點がいかぬ。言分といひのみこまぬ。清介は親御に此の様子知らせておじや。まつかせとかけ出すこちも是で二度起きた。ま一度起きるは定のものと 呟き内に入りにけり。嘉平次表に氣を付けサァ向ひの門も締つた。是迄こそ太儀なれ何處に何の障りもなし。ふたりかう並べば夫婦住ひし同然なり。是爰がそなたの内ぢやぞや。エヽ口惜しい世間廣う内へ入れ。親にも逢はせ町へも廣め。そなたに世帯を打任せ商ひも仕擴げ。嘉平次が女房は勤の者の風はない。何程の大世帯でも捌きかねまい女房ぢやと。いはせうと思うたに叶はぬ事は叶はぬ物。たつた僅か登實目餘りの。銀の瀬戸を越しかねて。浮名を取つて死ぬる事。無念なわいのと齒ぎしみしスヱテ頭もあげず泣きければ。されぱいのわしとても。一日なりと父御様に御奉公。姉御様を姑御とみやづかへせうものと。明暮の願ひ事叶はぬのみか此のしだら。及ばぬ願の逆罸か。此の前さる人に三世相見てもらひしに。先生で佛前の茶湯の茶碗打ち割りし報有り。愼めとの物語今思ひ合すれば。こなさんの此の商賣を打破つて身を果す。茶湯の茶碗打割りし。因果がめぐり來ましたと又伏沈み泣きゐたり。ハテかう成る身の三世相ろくな事が有る物か。夜半も過ぎたいざおじやと既に出でんとする所へ。嘉平次用が有る爰明けいと門叩く。誰ぢや。夜更けてやかましい用があらばそこからいへ。たわけ者。親の聲を知らぬか。五兵衛ぢや明けい。はつといふより仰天したつた一間の濱納屋を。さがが素振も見せともなし。どこに隱さん道成寺の鐘はなけれど即座の智恵窓の貫に帶をきつと結びさげ。サァ取りついてぶら下れと共に手をかけ筒井筒。井筒にあらぬ釣瓶おろし。干潟の沼を踏む足も 淵に沈むが如くなり。さあらぬ顔にて只今臥せる折柄。何事の御用がなと門の戸あくれば親五兵衛。常に好きの大脇差遠慮せずにこちおじやと。手を引入るゝは養ひ嫁のおきは。思ひがけなき嘉平次こりや何事が起つた。さがが嘸悲しかろと挨拶も何する

やらフシ聲も。上漏るばかりなり。地おきはは道々泣きたる顔親も涙を目に一ぱい。詞ヤイ痴漢め。己れ商人の又しては〳〵。見世を明けて餘所あるき晦日前物際は。武士の軍の虎口ぞい。跡の廿八日より出見世を出で。朔日は天滿にて阿呆をさらし、大事の五月の節季を捨て今日迄はどこにゐた。たつた今家主より知らされし。清水焼の仕舞物買に京へ上つて今朝歸り。親仁も機嫌がよいとは。五日にも十日にも親に顔をいつ見せた。さがとやらが顔さへ見れば親の顔も兄弟の顔も。おのれは見たう有るまい。鹽町の姉が禮に來て親子兄弟菖蒲の盃するとて。今日の節句は嘉平次の顔が見えぬとうぬが事くやんで。かはいや泣いて歸つた。さりながらこりや。此のおきはが顔ばつかりは否でも應でも地一期見せねば叶はぬと。いへばおきははわつと泣き。エヽ情ない嘉平次樣。いやなもの私が無理に添はうといふにこそ。お前の心が不定で外を家になさるゝゆゑ。親仁樣の御苦勞一ツ星の家も立ちませぬ。心さへ据つて家を踏まへる覺悟なら。おさが樣を呼入れてとかくお身の立つ樣に。わしや在所へ戻つて尼になりとも成りまするると道を正して泣きければ。さがは聞くより氣も亂れいとしやあのお人も。心の内は姤ましかろ。わしが離るる事もいや父御のも尤なり。エヽ死にやうが遲かつた今潮が差いて來て。此の身を取つても行けかしと。身を悶えてあこがるゝ。嘉平次は只何事も親の慈悲。御免とよりは一言も泣いて。俯向くばかりなり。五兵衛大きに腹を立て。詞何事も親の慈悲とは。扨は此の親は慈悲を知らぬと思ふよな。ヲヲ慈悲知らぬ。慈悲知らぬ親持つたが不祥。此のおきはにも親が有る。おのれと夫婦の約束で人の娘をもらうて。こつちの息子が合點せぬそつちの娘を返すと。すご〳〵と戻して一ツ星の五兵衛が世間へ面が出されうか。親に恥を與へる子に慈悲とはどこへ。エヽあさましい根性。二本差すを侍一本差せば。町人とばかり思ふか痴漢者。大小は此の胸に有る。武士に劣らぬ五兵衛と今日迄人に笑はれぬ。其の倅が胴性骨茶屋の銀負うて逃げ隠れ。死んでも恥がぬけはせぬ。おのれが身は廢つても此の五兵衛は立て通す。此のおきはと夫婦になれ。サアどうぢや。サア否か應かの返事せい。いやといふと此の脇指こりや。はてびつくりすなおのれは斬らぬ人も斬らぬ。おきはが母は身が姉父は他人。おきはを寡にする代り身が腹に突込んで。一ツ星の五兵衛が一分立てゝ見せう。サア返事。地サアなんとと抜きかけて責めつくる。おきはは柄に取付いて伯父樣殺す事はない。わたしが死ねば十方が濟みますと。縋り止めて泣き叫ぶさがが悲しさ身に迫り。死に手は爰に只一人父御前の目の前で。死んで見せんと涙の帶地たぐり取付き上らん〳〵と心ばかりに力なく。足は泥に引きしまり帶は中より

ふつつと切れ。蘆邊にどうと落水と共に フシ涙ぞ流れ逝く。地とても死身の嘉平次親の心を休むるは。やすい事〳〵是一生の孝行をさめと觀念し。詞ハア丶誤り入つて御尤。若氣の至り言ひ交せしを捨て難く。今迄お心背きしは不調法。是より魂入れかへ御意を背かず。いかにもおきはと祝言と。地いへどもさがは心を知らず誠と聞いて恨みやせん。死際迄偽る事親をだますか勿體なやと。思へばせきあげ聲どもりいひさし。てこそ泣きゐたれ。詞いや〳〵今迄幾度かたらされた。其の心底に極つた證據が見たい。ハテ證據とてなんと致さうぞ。ヲ丶證據には今宵すぐにこちへ來て。祝言の盃せい。それは餘りな親仁樣。中交はした女にもとくと合點させ。どこも首尾よう埓明けた證據。明六日の晝迄待つて下されといへば。親も打頷き尤々。然らば祝言は其の上。姉も呼寄せ一家集り盃せう。只今心の定つた證の盃。一つ飲んで身にさせ。いや出見世で終に酒飲まず酒とてはござらぬ。ヲ丶サウあらうと思うて酒は身が持參したと。羽織の下より一升入の祕藏の瓢簞取出し。サア親の酌一つ飲め地あつといふより素燒の盃取出す。詞いや〳〵小さいそちが飲むは知つてゐる。鉢でも茶碗でも大きな物で一つ飲め。さのみ深うはたべませぬ。地どれか是かと茶碗尋ぬる其の音を。聞くにもさが袖しぼる露の萩燒大皿出し。慮外ながらと受けければてうど飲めと。瓢簞傾けつぎかくる酒にはあらぬ糀の色。花の壹歩のから〳〵〳〵。さら〳〵〳〵と七八十。皿堆高く盛り上ぐる子は呆れうつかりと。親の顏のみ打ち守れば。親はわつと聲を上げやれ。慈悲知らぬ親の酒を見よ。誠の慈悲の味を飲みて知れやと泣きければ。ハア丶有難しとばかりにて。親の膝に打ちもたれ。聲も惜まず歎きしは フシ性は。善なる涙なり。包むに餘る親心。不便やかはいや此の春より。うろたゆる體を見て。詞此の酒一献飲ませたく幾度か思寄つたれど。いや〳〵氣の定まらぬ間は却つて毒酒とひかへたり。地此の酒飲んで方々の恥辱を雪ぎ。無明の酒の醉さませ。身どもは年より氣丈にて病といふ事知らねども。五六日は汝ゆゑ。胸も痛んでフシ不食する。詞とかく人の親には病となるも子の心。藥となるも子の心。今宵の意見を聞入れて彌々心を持直し親の藥となつてくれ。地長生したいと思はねども。せめて三十二三迄とつくと見たて。人になして死ねば樂ぢやと咽せ返り。成人の子を引寄せて。背中を撫でて泣きくどく フシ親の。心ぞ哀れなる。地嘉平次も人々の心の中を思ひやり。一言もなく差俯向き。落つる涙は盃の是も上越すばかりなり。おきはも涙にくれながら晦日の夜から昨夜迄。案じて一目もおよらずお心疲れお身の毒。歸つてお休みなされませ。詞ヲ丶歸らう。これ嘉平次。此の脇差は死んだ母と身どもが祝言の時。聟引出物

として舅よりもらひ。枕許の守刀となしたるゆゑ家内に何の怪我もない。地起縁のよい脇指今宵は身どもがおきはが親に成り代り。聟引出に取らすると仇とは知らぬ凡夫心。サア今宵こそはや歸つて明日の晝迄ゆるりと寢よう。やい嘉平次埒明き次第起しに來い。明日顔見よう。さらば〳〵と立出づる。さらばは誠のさらばにて明日見る顔は死顔の。生顔見るは親と子のオクリ是ぞへ此世の別れなる。地嘉平次は親の影隱るゝばかり見送つて。内に駈入り窓の下覗けばさがは消え入るばかり。泣きしみづいて音もせず是々。詞萬事皆聞いてであろ忝いといはうか。悲しい事といはうか是で結句嘉平次が。親の冥加に盡きるわいの。いや〳〵そりやこなさんの不孝といふもの。今の酒とは金さうな。どこも首尾よう仕舞うておきは樣と夫婦になり。親御の心を悦ばせて下さんせ。わし一人死ぬれば濟む。地どの道からどういうても。只こなさんがいとしい惡う聞いて下んすなと。眞實見えたる涙の體。詞アヽひとり死なせてよい物か。もらうた壹歩は百ばかり銀さへあれば何談合も仕易い。假令どうなればとて其方を捨て。おきはと添ふ氣は微塵もない南無三帶が切れたか。地表から廻つておじや。勝手知るまい連れに行かうと表を明けて出る所に。印傳屋の長作屈竟の者連れて。詞ヤア嘉平次。親五兵衛は爰にぢやげな逢ひたい〳〵。わけもない長作何時ぢやと思ふ。親仁が爰へいつわせた事がある。用があらば明日なりと明後日なりと。松屋町へ行て逢へ歸れ。〳〵と押出す。是何とする。親仁に逢ふもそちが用。内々の手形の銀子不埒ゆゑ。明後日お願ひ申すと斷に越したれば。松屋町へ行けと有るそれゆゑ自身行つたれば。親仁は是へわせたと有る千も萬もいらぬ。銀戻すか戻さぬかと無體に内に入りければ。地嘉平次先へ駈込んで壹歩を隱さん〳〵と。皿の上に中つくばひ前打合せ合せても。膝の間より顯るゝフシ金は金にて銀ならず。詞ヤ嘉平次見事な。町人は神佛とも主君とも。額に戴く一歩を胯にはさんで股が冷えよう。さ程澤山な一歩を戻すまいとはそりやわやぢや。綺麗にしやんと渡せ〳〵。コリヤ長作。十六兩たゞしられそれがぞもとに嘉平次が。うろたへ始め命沙汰に及んだ。お願ひ申さば申上げ仔細の有る此の一歩。地粉にはたかれてもやる事とならぬ。ヲヽ此の長作が粉にはたかれても取つて見せう。詞ヤアしやらくさい常々の嘉平次とは違うた。口廣い事いふと思ふな。命を先へ出して置いて取つて見よ。ヲヲ取つて見せうと。つかみつく手を地むんずと取り。見世の小隅へはつたと投げつくる。起きあがつて組付くをまつかせとひつかゝへ。上に成り下に成り見世の燒物皿茶碗。花入粉微塵五重の塔西行法師も痛手を負ひ。ちやぼの鶏飛んで散り蹴爪にけられて長作が。ころぶ所をどうと乘り。備

前鉢にて天窓の鉢覺えたか。〳〵と打ち碎かれて錦手の。目鼻血みどろちんがいに嘉平次の生盜人。出あへ〳〵と呼ばはつて フシ闇に紛れて迯け失せけり。地エヽ嬉しや〳〵一期の本望遂げたぞ。親の御恩の一歩を汝にのめ〳〵取られうかと。見れども〳〵皿打明けて一歩はなし。詞ハアヽ今のどやくやに同道めがつかんで走つた。サア地嘉平次死物狂ひ一寸もやらうかと。もらひし脇差ぼつこんで駈出でんとする所に。紺屋の手代若い者どや〳〵と門口に。詞嘉平次殿あんまりな。たま〳〵歸つて何ごと仕出す。地兎角の評議は明日一足も出させぬと。外より門口はつたと締め夜明迄張番と。棒突き並べて動かせず。譯を聞いて下されと斷つても詫ても。理立たねば男も立たず。一分立たねば一歩もなし。死ね〳〵と來る死神の引手は爰ぞと窓の子を。ふまへてひらりと飛ぶ所を涙の袖にひつたりと。抱きとめてどうぞいの。どうとは死ぬるばつかり足音しやんな泣聲すなと。身より餘りて涙川せきもとゞめよ岩をこし。番は閻魔倶生神。紺屋の虎落劍の山。先には死出の大和橋踏むは三途の泥の海迷ひ。こがれて 三重

嘉平次おさが道行　下之卷

南無阿彌陀〳〵。南無阿彌陀佛南無阿彌陀〳〵。ギン南無阿彌陀〳〵。南無阿彌陀佛南無阿彌陀〳〵。南無阿彌陀佛を フシ頼みても。西を背後に歩み行き極樂淨土に背くとも。利劍卽是と聞く時は死する刃も彌陀の縁。南無阿彌陀佛の フシ聲細く。ハルフシ心ぼそさや。來世迄。かう手を引いて行く事か。もしや離れはせまいかと引き合ひし手を引寄せて。スヱテなほ抱きしめて泣きつくす。けふの祝の菖蒲の露も。われが袖には愛はしや辛や端午の紙幟。神にも世にも捨てられて菖蒲刀の切先に。かゝる契の惡縁と。返らぬ道を辿り行く。涙の雨に星消えて可愛い其方いとしい殿御。長地顏も見せぬか五月闇命も世をも我が身をも今ひと時に堀詰の。あれ井戸にも女夫有るわいの。そちも妹脊はかはらねどこちは釣瓶の繩切れて。横に切れゆく道筋の是六道の新道と オクリ花屋が。辻にしよんぼりと。本フシ憂き數々を今宵しも。ハルフシ數へ盡して。下寺町の。後夜の響も身にしみ〴〵と。今ぞ二人が一生の夢の寢覺を松屋町。是が父御の通りかや我が生れも此の筋の。親兄弟も此の身とは フシ知らで夢をや結ぶらん。結びとめてもとまらぬは。わしが人魂生玉坂の。草にやつるゝ白露をあこがれ出づる玉かとて。拾へば消ゆる初螢夜は思ひに燃ゆれども。晝は名に負ふ遊山所の。貴賤群集のだてつくし人を勇めの藝づくし。地茶屋が藥屋の軒續き。竹の柱に節こめし。稽古淨瑠璃太平記。箏のつれ歌引きかへて松にはげしき。雨風や我は初音か時鳥。冥途の友と鳴きつれて。いとゞしをるゝ フシ袂かな。地それ覺えてか此の春の。花の紋日を此の

床で二人寝覺の小盃。そなたま一つおれ一つさはる手元に萬歳が。あいもきようある相の山花は。相ノ山散りても。根に返る人は。歸らぬ死出の山。死して歸らぬ。道ぞとは今の憂き身を歌ひしか。三途の瀬戸の。フシ燒物盡し。親は堅手の茶碗と茶碗。我瓶付けて我と我が名をや流さん耻かしの。我が噂も明日よりは。スエテ歌祭文を身の上に。サイモン坂町邊のナ通り筋。柏屋内におさがとて。年は廿の。ヨイ花盛り。客衆々々の揚詰を。貸すのもらふの暇なきつらい勤の中に扨。深かい願ひは一ッ星の。ユリ嘉平次故に身をはめて。變るまいとの七枚起請オクリ書いて。二人がナホス取りかはす。ハルフシ小指の血潮。杉原に押して心をみがきもり。衛士の焚く火と品かはるかの小林が舞ひ扇。是も浮世のウタヒ形見こそ今はあだなれ松風や。無常の風も立騒ぐナホス辨財天の鰐口の。鰐の口より恐ろしき。追手の聲のあれ〳〵〳〵。追はへて爰に北向の。八幡宮の燈明もおのれとしめり行く先は。罪業の程思はれて ギン呵責おそろし鬼踊の。ウエテ寺の藪垣物すごく。身をふる。はしてぞ立ちにけり。

地さがは涙に行きやらずなう夜明に間もあるまいが。どこで死なうと思うてぞ。詞ヲ馬場先の松原を最期場と志し。來事は來たがあれ見や。星さへ一つない雨空。たとひきれいに死んだりとも血潮の體を雨に打たれ。地むさいきたない死顔と笑はるゝも口惜しい。此の茶見世を最期場に極めんと。羽織打ち敷き座を組めば共に寄添ふ床の上。サア、詞今が最期ぞや。臨終の一念は無量劫を引くといふ。なんにも心にかゝらぬの。ア、くどい事。思ひ合うたこなさんと一所に死ぬるわしぢやもの。うき世の本望遂げたれば。思ふ事も悔む事も露程もないわいのと。地いへば平は猶泣出し。そこをいはうといふこと。詞今死ぬる今迄も我は親の顏を見る。親兄弟の事ばかりいひつづけて我は死ぬるぞや。そなたも父母持つた身今日が日の最期迄。地父とも母ともいひ出さぬは我に未練を見せまいため。嗜み深いそなたぢやと思うて涙がこぼるゝと。語ればさがはわつと泣き。忘れてゐた物ひよんなこと母樣ゆかしうござんすと。男にひたと取り付いて聲の下行く涙の流れ袂に。たまる哀れさよ。詞ヲヽ出來しやつた言うて了ふは懺悔の一つ。地罪を助かる種ともなる。サア夫婦が親の事いふ其の詞を冥途の引導。一時も急がんと氷の刃するりと拔き。詞既に血潮と鹽町の畠傳ひにあれ誰やら。サア地南無三寶見知りの有る柏屋の提燈。さがは寸善尺魔いかゞせんとうろたゆる。賢く茶見世の圍。葭簀ひろげてぐる〳〵ぐる。平もぐる〳〵ぐる〳〵まきに。ふたり簀卷の妹脊川。流れの智惠も才覺も フシ今宵限りのうき身かな。地親方柏屋半兵衛小辨諸共方々と尋ねかね。詞エ、下司の智惠は跡から。紋付の提燈で尋ぬるは無分別。

さぞ小辨もしんろかろ俺もくわをぬかした。爰でしばらく休まうと。地蠟燭消えて立寄るも。同じ茶見世の床の上フシそれと知らぬぞ是非もなき。地小辨しく／＼泣出し。いとしやさがさんどうしてぞ。傍輩といひ姉女郎ほんの姉さん妹と。兄弟の契約してあのさん便りに勤めたに。もし心中などして死なんしたらわしや木から落ちた猿。親方さん頼みます。早う尋ねて下さんせとスヱテ縋りついて泣きければ。詞ヲヽやさしい事よういうた。親方の身になつて見い。かはいいばかりかさが死ぬると大きな倒れ。年のまはり合せで損するも有る事。それは糸瓜ともおもはぬが。聞えぬは嘉平次。此の半兵衛を男でないと思うたか。さがをつれて退く手間でおれがうちへ駈込み。まつかう／＼した首尾で死なねばならぬ難儀。男と見かけて頼むとたつた一言いうて見い。人にも知られた柏屋の半兵衛。いや知らぬといはうか。ほんにやれ／＼家財寳つても救ふ心底。地胸の扉に鎹がなうて無念なわい。詞アヽ是も跡へん今いうて返らぬ事。さあ小辨。中寺町から藤の棚。ま一ぺん尋ねうといふ所へ。地西東より大勢つれ。あの茶見世に泣聲はさがと嘉平次。サアヽしてやつたぬかるなとばら／＼と立ちかゝり。半兵衛小辨にむさぼり付く。死なば嘉平次一人死ね。詞大事の奉公人よう殺さうとしたなあと。髻取るやらひつぱるやら提燈あげて顔と顔。ヤア半兵衛でないか町の衆か。エヽ悠長な人に世話をやかすことぢやないわい。さがが事を仕出せば損といひ大きな町の騒ぎぢや。サア立て／＼。いかい皆の苦勞ぢや。草臥れた上に小辨がめろ／＼泣くので共に氣が落ちて來て。少爰で休んだ。どうでこいつら死なうわい。地つんと足が進まぬと歸る柏屋止まる柏。命枯葉の夜嵐に。フシ又東西へぞ別れける。地人影なければ嘉平次も。さがも葦簀ほどいて溜息つき。今のを聞いてか聞きやつたか。詞半兵衛が情の詞エヽ男ぢや過分な。小辨がやさしい心ざし。地忝いと嬉しいと。胸に餘れば譬に漏るフシ二人が歎ぞ至極なる。アヽ何のかのと隙どる程涙の種。サア今ぢや念佛申しやと引寄すれば。さがはわつと泣き出しまちつと／＼まあ待つて下されとスヱテ前後不覚に取り亂す。詞待つてくれとは命が惜しうなつて來たか。アヽ今になつて愛想づかしいうて下んす。命惜しいほどなら高で身をうつこともない。地逢ひ始めて今日が日迄鳥の鳴かぬ日はあれど。顔見ぬ日もなかつたに死ぬる今夜に限つて顔さへ見えぬ雨空。未來の暗さが思はれてそれが悲しうござんすと。歎けば男も涙ぐみ。詞ヲヽ道理我とても。地今生の名殘ま一度顔も見たけれど。燈とては夏草にせめて螢の影でもほしい。ヲヽ思ひ當りしと小石拾うて脇差の。鍔を火打の石の火の光待つ間の命の樂み。下緒の總のしけ糸を。火口となしてかち／＼かち。

かつしと打つてふき付くる。火かげも息も微(かすか)にて互に見かはす顔と顔。永(なが)い別れになつたかと。わつとばかりに縋りつき大聲。あげて歎きしは理(ことわり)。せめて哀れなり。地既に明け行く烏の聲泣く〳〵胸を押し擴げ。サァなんにも思ふ事はない。ヲヽでかした〳〵と拔いたる脇指取り直し。南無阿彌陀佛と刺通せば。うんとばかりのりかへる。ぐつと刳(えぐ)れば手足をもがき。又刺通せば身をもだえ刳り。くり〳〵目もくるめき。婆婆に出る息絶え果てゝ。つひに冥土に引入れたるあへなき最期ぞ〳〵あはれ成る。地死骸を繕ひ血刀よつく押拭ひ。同じ刄と思へども守りにせよとの親の讓。此の刄(は)に死するは最期の不孝。二世迄夫婦抱へ帶。契は先の世〳〵迄もかさぬる床の竹簀垣(すがき)。死顔見せじと押包む羽織も空も黑羽二重。床几をがはと踏みはづせば。色も變じて目くるめき フシ忽ち息は絶えてける。地ツメ惜しや五日の花菖蒲(しやうぶ)花の體(からだ)を血に染めて。ギン

戀の刃(やいば)に伏見坂の世語り。とこそなりにけり。